

旧南洋興発株式会社の社宅街について

-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その14-

正会員○辻原万規彦^{*1} 同 今村仁美^{*2} 同 安浪夕佳^{*3}

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

サイパン、テニアン、ロタ、製糖業、工場

1. はじめに

一連の本研究は、戦前期の南方諸地域を対象として、1) そこで行われた日本人による建築活動の実態、2) 当時用いられた室内環境調整手法の実態、3) 戦前期日本の「南方進出」の技術的側面、特に建築活動の側面、を明らかにすることを目的としている¹⁾。

これまでに、サイパン・チャランカノア地区²⁾、テニアン・サンホセ地区³⁾ ならびにロタ・ソンソン地区⁴⁾に残る日本統治時代の建築物に関する調査結果⁵⁾を報告したが、当時の社宅街の復原は行っていなかった。一方、小野らは米軍撮影の航空写真を使用し、当時のサイパン・チャランカノア地区とテニアン・サンホセ地区の構成を示している⁶⁾が、社宅街に焦点を充てて、残存状況と合わせて詳細に報告している訳ではない。そこで、本稿では、日本統治時代の南洋興発の社宅街の詳細な復原図を作成し、考察することを目的とする。

なお、本稿では、当時の用語や呼称をそのまま用い、引用文などは、原則として現代仮名遣いに改めた。

2. 南洋興発で働く人々

南洋群島で最大の企業であった南洋興発株式会社⁷⁾の工場と農場で働く人々のほぼ全ては、南洋群島以外からの「移民」であり、そのうちでも沖縄からの移民が多かった⁸⁾。昭和10(1935)年頃までには、家族も含めると二万人以上もの移民がサイパン、テニアン、ロタなどに移住し、南洋興発もしくは関係会社で働くことになり、多くの社宅が建設された。

工場での労働者は、社員と現業員に分かれ、社員はさらに事務系と技術系に分かれ、それぞれ、書記補/技手補→書記/技手(主任・課長クラス)→参事/技師(所長・工場長クラス)→参与(古参社員)→取締役の順に昇進した。一方、農場での労働者は、小作人、準小作、人夫に分かれていた⁹⁾。

3. サイパン製糖所と社宅街(図1)

サイパン島チャランカノア地区(のち、チャランカノア町)には、南洋興発最初の工場であるサイパン製糖所が置かれ、南洋群島の産業の中心地であった。

工場の敷地は、「チャランカ沼の傍に選定」¹⁰⁾された。これは「淡水の乏しい南洋に於て工場用水として沼の水を用ひ得る絶対的の強みがあり、又海にも近く、汚水の排水にも製品の搬出にも極めて便利であったからである。」¹⁰⁾さらに、「工場の周囲には事務所、社宅、倉庫、酒保等数十棟の建物を新造し」た¹¹⁾。

サイパン製糖所チャランカノア町社宅街¹²⁾では、サイパン駐在の重役¹³⁾社宅、幹部級社宅から現業員用の四戸建社宅、さらには独身用社宅(独身寮)などが建設されたほか、倶楽部、食堂、酒保、医務室、幼稚園、(従業員用)浴場、テニスコートなどが建設された。また、町役場、巡査駐在所、小学校なども設けられた。

社宅は、当初建設された棟数を上回る数が、昭和19(1944)年に撮影された米軍の航空写真から確認できるため、長年に亘って次々と建設を続けていたと考えられる¹⁴⁾。サイパン製糖所も当初は製糖工場だけであったものが、のちには酒精工場を併設し、また時代と共に製糖工場も増強したため、それに応じて増加した労働者を収容するために社宅を増やし、社宅街が周辺部へ広がったと考えられる。そのため個々の社宅の建設年代はこれまでのところ確定はできていない。

倶楽部は、図書、ラジオ、ビリヤード、碁、将棋、麻雀などを備えて「知識涵養ヲ計ルト共ニ娯楽慰安ニ供シ」¹⁵⁾ており、娯楽の少ない南洋では重要な施設であった。また、宿泊も可能であり、旅行者が泊まるほか、小学校の教員が宿舎としていたこともある¹⁶⁾。

南洋群島内の初等教育機関としては、日本人向けの小学校と現地住民向けの公学校が設置された。チャラ

Restoration of three company towns developed by South Seas Development Company

- Studies on the building activities of Japanese architects and their control of indoor environment in Oceania and Southeast Asia under the Japanese administration Part 14 -

TSUJIHARA Makihiko, IMAMURA Satomi and YASUNAMI Yuka

ンカノア町社宅街では、社宅街の南端にチャランカノア小学校が設けられた。後述の2ヶ所の社宅街では、社宅街の中に小学校は設けられておらず、行政の中心であったガラパン町が離れていたとは言え、チャランカノア町社宅街が多くの人労働者を抱えており、彼らの子弟の教育機関が必要であったことが窺える。

4. テニアン製糖所と社宅街 (図2)

テニアン島ソンソン地区(のち、テニアン町)には、南洋興発最大(第一、第二工場併せた公称能力2,000トン)の製糖所であるテニアン製糖所が置かれていた。

工場敷地の選定については、詳細は不明であるものの、淡水を得るための沼はサイパンに比べて内側に入っていることから、製品の搬出の利便性を優先し、棧橋の建設に便利な場所が選ばれたと考えられる。また、工場用の冷却水として海水を用いたことも海のそばに敷地を選定した理由の一つであると考えられる。

テニアン製糖所テニアン町社宅街¹⁷⁾の建設の経緯は、『南洋開拓拾年誌』に以下のように述べられている。

「テニアンに於ては諸建物の建設に於ても亦極めて組織的に、最新の都市計画にも似た整然たる造営を行うことが出来たのであって、即ち工場の背後一帯の土地でソンソンの海を一望の下に収める風向絶佳の傾斜地を利用し、工場に並んで最下段に大倉庫七棟、鉄道機関庫等を設け、その上段の傾斜地に事務所、倶楽部、医務室、酒保等を初めとし七十棟に達する瀟洒な社宅、二十棟の附属建物等悉く整然快適に設計したのであって、其の総建坪三千五百坪、大正十五年十月着手以来四万人の人工を懸けて昭和四年末全て竣成したものである。

(中略) 其の緩かな傾斜地は海からの涼風を真正面に受けて、実に住み心地の良い佳地になって居る。

社宅街を通ると広い芝生とカマチリの生垣が如何にも美しい。そうしてソンソンの海を工場も一望の下に収めて居るのであって、明るく、涼しく、寛濶な多くの建物には、未だサイパンの様な落着きは出て居ないけれども、真に近代的な文化都市を見るすがすがしさを感じ得るのである。」¹⁸⁾

上記の第一工場建設後も、第二工場竣工にあわせ、社宅などをさらに建設したため周辺部へスプロールし、最終的には図2のような社宅街が形成された。また、東側に隣接して、行政機関などが集まるテニアン町の

市街地が建設された。テニアン町社宅街でも、様々な施設が建設されたが、倶楽部には武道場も併設された。また、医務室については、「レントゲン等を初め一通りの設備は総て整え、数名の産婆も置き、移民の健康衛生状態に細心の注意を払って居るのである」¹⁹⁾ だった。

教育については、南洋庁による公の教育以外に、南洋興発による従業員育成のための教育機関も設置された²⁰⁾。補習学校と徒弟学校は、青少年従業員職業教育のために、サイパン、テニアン、ロタの各製糖所に設置された。社員を講師として、夜間に授業を行い、修業年限は2年であったが、1年終了時に専習学校の受験が可能であった。専習学校は、中堅技術社員の育成を目的として、テニアン製糖所のみで設けられた。修業年限は3年で、全日制、全寮制であった。いずれの学校も、学費は無料で、諸経費は社費で賄われていた。

5. ロタ製糖所と社宅街 (図3)

ロタ島ソンソン地区(のち、ロタ町)に置かれていたロタ製糖所の工場は、当初、製糖工場として建設されたものの酒精・合成酒工場に転換された。また、島中央部のサバナ高地に燐鉱の採掘場が、テルノン地区に燐鉱工場と社宅街を持つ燐鉱課が置かれていた。

工場の敷地の選定については、詳細は不明であるものの、ロタ島の珊瑚礁は島の北側に発達しているため、通常は北側の海岸の方が南側の海岸に比べて波が静かである²¹⁾ ことから、運搬を優先し、工場の冷却水として海水を用いることを前提に選定されたと考えられる。

ロタ製糖所ロタ町社宅街²²⁾は、他の2ヶ所の製糖所の製糖工場よりも規模の小さい工場が当初建設され、なおかつのちに酒精・合成酒工場に転換されたため、図3のように他の2ヶ所の社宅街よりも規模が小さい。社宅街は、工場を見下ろす高台に建てられ、「景色もよろしく風通しのよい涼しい処で」あった²³⁾。一方、ロタ町の市街地は、社宅街から若干離れた場所にあり、行政機関や小学校などは、この市街地に建設された。

他の2島と異なる施設として、ロタ島では簡易上水道が敷設された。他の2島をはじめ南洋群島内の多くの島では、上水道のための水源地を確保することが難しかったため、住宅や各種施設には、雨水を貯める天水タンクが必須であった。しかし、ロタ島では、当初から島中央部で湧水が発見され、「ソンソン水道」を建設し、工場、社宅街や市街地へ給水がなされた²³⁾。

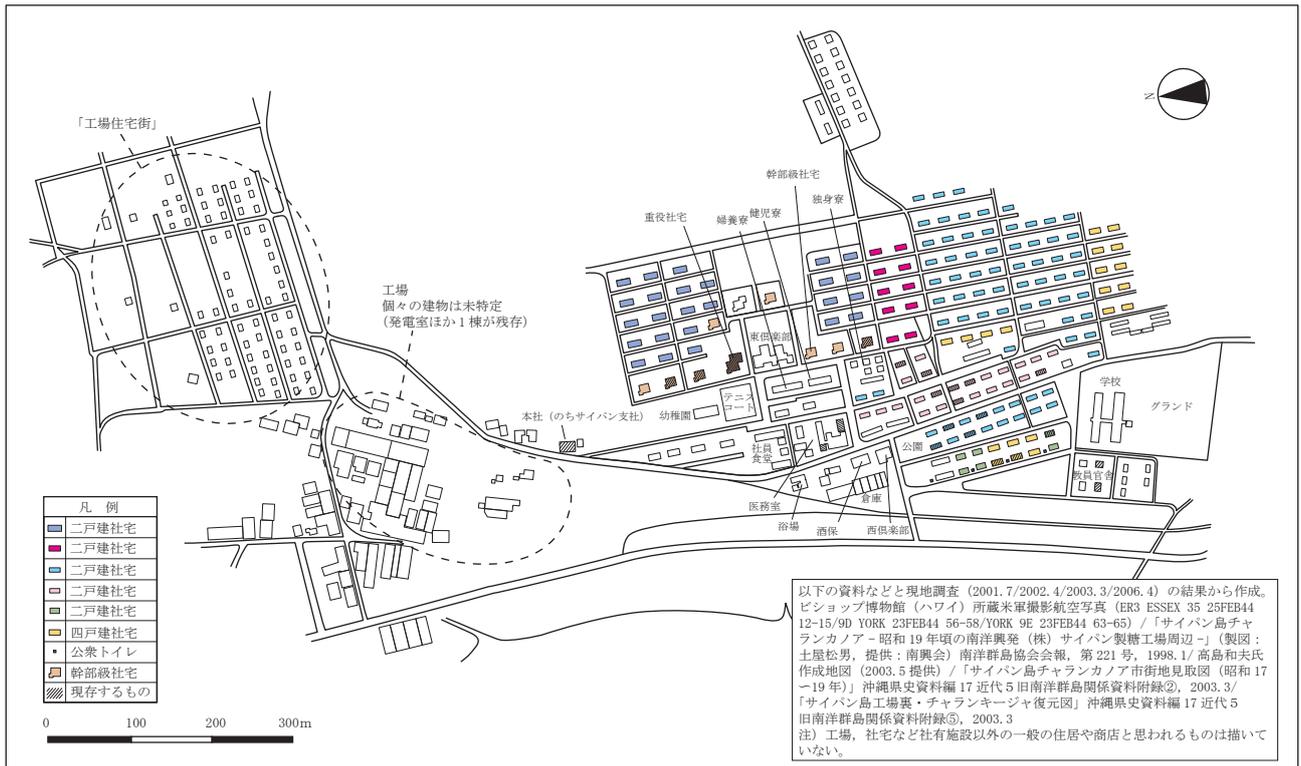


図1 サイパン製糖所チャランカノア町社宅街復原図

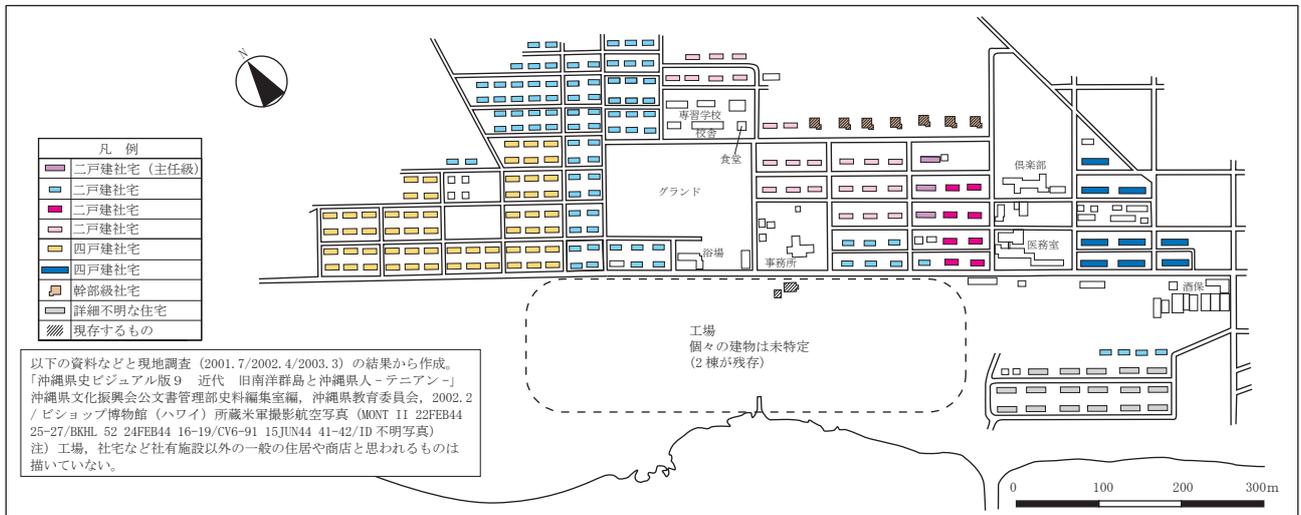


図2 テニアン製糖所テニアン町社宅街復原図

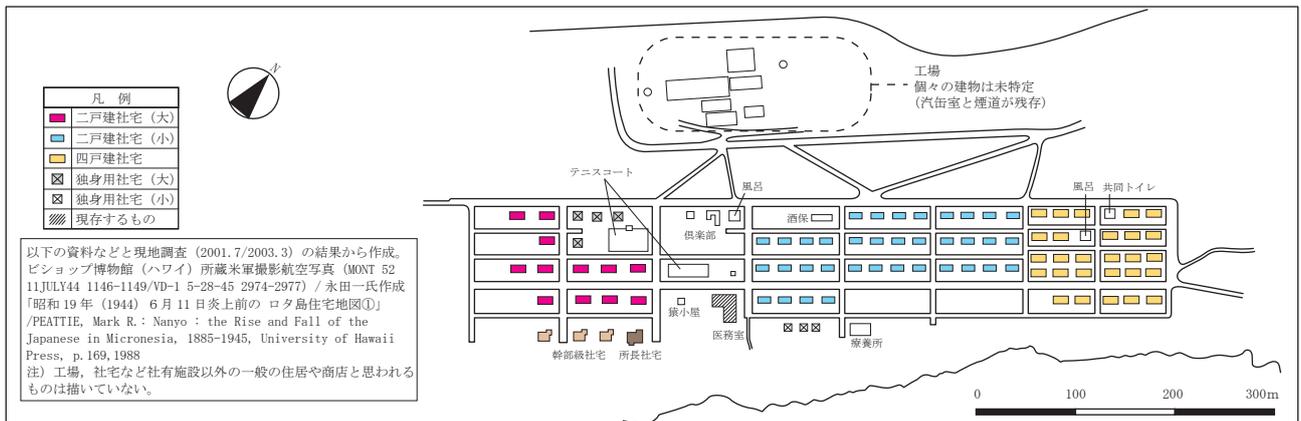


図3 ロタ製糖所ロタ町社宅街復原図

6. 南洋興発を支える社宅街の構造

南洋興発の3ヶ所の社宅街のうち、チャランカノア町社宅街は他の2ヶ所の社宅街と異なり、図1を見る限り、整然と計画された社宅街とは言い難い。しかし、いずれにしても、海岸側に工場が立地し、海岸線にほぼ平行に（軽便）鉄道の軌道が配置され、その背後に社宅街が広がる構造は共通している。社宅街の中でも酒保や医務室などの施設は、比較的工場に近い側に配置された。また、内地などの多くの社宅街と同様、幹部社員用、一般社員用、現業員用などの各層ごとにまとまって社宅が建設された。ただし、チャランカノア町社宅街では幹部社員の社宅が社宅街の中心に近く、なおかつ工場の近くに建設され、その周りを一般社員や現業員の社宅が取り囲むように建設されたのに対し、テニアン町とロタ町では、幹部社員の社宅は工場からは遠い位置に建設された。このうち、特にテニアン町では、傾斜地に社宅街が建設されたことから、前述のように快適性を考えてのことであると考えられる。

また、南洋興発の製糖業を支える広大な各島の農地は、幾つかの農場、農区に分けられ、工場周辺の社宅街と共に、各農場の中心部にも小さいながらも社宅街が形成された²⁴⁾。各島の農地にくまなく敷設されて甘蔗を運搬する鉄道は、各農場の中心部と各製糖所の工場・社宅街を結ぶ役割も担い、ネットワークが形成された。このような構造は、当時、日本の製糖業の中心であった台湾でも見られるが、製糖会社が主たる産業を担っていた島で、なおかつ1つの島に1つの工場が建設されたという点で、東洋製糖株式会社（のち、大日本製糖株式会社）の製糖工場があった南大東島との関連が興味深い²⁵⁾。鉄道に平行して社宅街を展開させた南洋興発の場合とは異なり、南大東島では鉄道と交差する方向に社宅街が伸びていた。ただし、南大東島でも、特に社員用の社宅は工場よりも若干高台に建設されており、この点では南洋興発の社宅街と似ている。

7. まとめ

本稿では、日本統治時代の南洋興発の社宅街の詳細な復原図を作成し、当時建設された施設と社宅街の構造について考察を行った。今後、他の製糖会社の様々な社宅街との比較を行う予定である。

謝辞 史料の閲覧にあたっては、社団法人糖業協会にお世話になった。本報の一部は、平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B））、課題番号20760430（基盤研究（C））、課題番号20560598）によった。記して謝意を表す。

参考文献・引用文献・脚注

- 1) 本研究全体の枠組みは、本稿と同タイトルの「その1」（九州支部研究報告、第40号・2、pp.129~132、2001.3）を参照。
- 2) 辻原、今村、香川：サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）、建築学会関東支部研究報告集II、第73号、pp.453~456、2003.3。
- 3) 辻原、今村、香川：テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）、同上、pp.457~460、2003.3。
- 4) 辻原、今村：ロタ・ソントン地区に残る日本委任統治時代の建築物、建築学会九州支部研究報告、第43号・3〔計画系〕、pp.585~588、2004.3。
- 5) 辻原万規彦：旧南洋群島における歴史的建造物の残存状況と今後、歴史的建造物の診断・修復に関するシンポジウム委員会中間報告・論文報告集、pp.159~168、2006.6。
- 6) 小野啓子、ジョン P リー、安藤徹哉：A STUDY OF URBAN MORPHOLOGY OF JAPANESE COLONIAL TOWNS IN NAN'YO GUNTO : Part1 Garapan, Tinian and Chalan Kanoa in Northern Marianas 日本建築学会計画系論文集 第556号、pp.333~339、2002.6。
- 7) 松江春次：南洋開拓拾年誌、南洋興発、1932.12。
- 8) 沖縄からの移民がかかわる農場の経営と組織、労働の様子、暮らしなどの詳細は、次の文献などを参照。今泉裕美子：南洋群島、具志川市市史、具志川市教育委員会、pp.547~750、2002.3。
- 9) 柴野川敦：南洋興発株式会社の辞令と職階 宇具志川知念清孝（旧名三良）氏提供資料から、具志川市史だより、第13号、pp.55~59、1998.3。
- 10) 前掲『南洋開拓拾年誌』、p.93。
- 11) 前掲『南洋開拓拾年誌』、p.121。
- 12) この地区に残存している遺構などは文献2)、5)を参照。
- 13) 定款上の本社はサイパン・チャランカノア（のち、パラオ・コロル町に移転）に置かれていたが、実質上の本社機能は東京事務所が果たしており、サイパンではサイパン駐在重役が執務していた。
- 14) 社団法人糖業協会所蔵の営業報告書には、事務所、社宅、倉庫の内訳は不明であるものの、毎期ごとに完成した建築物の棟数が挙げられている。
- 15) アジア会館アジア太平洋資料室所蔵の個人アルバムより。
- 16) 清水仁：チャランカの思い出、サイパン会誌 思い出のサイパン、サイパン会、pp.208~209、1986.6。
- 17) この地区に残存している遺構などは文献3)、5)を参照。
- 18) 前掲『南洋開拓拾年誌』、pp.188~189。
- 19) 前掲『南洋開拓拾年誌』、p.210。
- 20) 以下の文献などを参照。伊礼真栄編：南洋興発株式会社附属専習学校校誌、金城善昌、1990.12。阿部興資：専習学校の沿革、南興会便り、第32号、pp.9~11、1987.8。
- 21) 駒澤幸男：南洋生活15年間の思い出〔ロタ島編〕、南興会便り、第43号、pp.7~13、1991.4。
- 22) この地区に残存している遺構などは文献4)、5)を参照。
- 23) 南洋群島協会：南洋群島を語る座談会、南洋群島協会々報、第18号、pp.1~13、1962.8。
- 24) 各農場の中心部に形成される社宅街では、農場事務所、小学校、巡査駐在所、酒保分店（売店。本店は工場周辺の社宅街にある。）、倶楽部（活動写真、芝居などを行うほか一般の集会なども行う。）、医務室分室、理髪所、浴場などが建設された。ただし、全ての農場にこれら全てがそろっていた訳ではない。
- 25) 辻原、今村、安浪：旧大日本製糖大東製糖所と北大東出張所の社宅街について-製糖業に関わる建築活動からみた戦前期日本の影響下にあった地域の相互比較に関する研究 その1-、建築学会九州支部研究報告、第48号・3〔計画系〕、投稿中、2008.3。

*1：熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士（工学）

*2：アトリエ イマージュ

*3：熊本県立大学環境共生学部 助手・修士（環境共生学）

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng. Atelier Image

Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. ESS